

日本経営学会が大正十五（一九二六）年に呱呱の声をあげてから、間もなく七十年を迎えようとしております。この間、日本の経営学界においては、諸外国の経営諸学説を精力的に導入しながら、企業経営に関する多様な側面の研究、多様なアプローチ等が行われ、しかも精緻化されてきたといつてよいでありましょう。今日盛んになってきた現状分析的諸研究も、基本的にはそのうえに立っているものと考えられます。このような研究の精緻化・細分化に伴って、経営学に関係する学会がこれまでに多数設立されてきていることは、各位のご承知の通りであります。それらは例えば組織、労務、労務理論、経営財務、経営工学、経営数学、品質管理、工業経営、商業、商品、広告、経営診断、実践経営、経営教育、産業教育、経営哲学、オフィス・オートメーション、中小企業、経営史、リスク・マネジメント、生命保険経営、等々の学会であり、かかる隆盛を見ると、我々も同慶にたえません。

このような諸学会隆盛の状況に鑑みると、日本の経営諸学説はもちろんのこと、米独英仏露中ほか諸国における経営諸学説の研究が長年にわたって行われ、現在もなお多数の熱心な研究が続けられているにもかかわらず、諸説必ずしも一致せず、残念ながら各人各説、真に経営学説の基礎が確立されたとは言えないのではないかと思われまふ。世界はまさに歴史的転換期にあり、二十一世紀を目前にして、経営学の重要性はいよいよ加重され、経営学研究者の任務の重大性も痛感されます。

この時に当たり、経営学研究の一段の発展を図り経営学説の基礎の確立を企図するためにも、これまでの諸学説の歴史的展開の跡を顧み、諸学説の比較的研究に批判的研究を重ね、将来への発展のための基礎をおく必要が痛感されます。昔から温故知新といわれています。歴史的研究は単に懐古趣味に止どまるものではなく、むしろ積極的に将来への発展の道を発見するところに意味があります。

このように考えて参りますと、現在のように経営学理論の歴史的研究者が一堂に会して切磋琢磨する機会をもち得ないまま孤立分散的な研究スタイルを強いられていることは、上述の点から見て甚だ遺憾な

ことと言わざるを得ません。また、特に将来の若い世代の研究者のためにも、広く先人の諸学説を歴史的、理論的に検討しそれぞれの意義を知る為の場を設定しておくことは、半ば我々の義務でもあるように思われます。

以上の趣旨から今般、経営学史学会の創立を呼び掛けたく存じますので、意とするとおころをお汲み取り戴き、ご賛同ご協力賜りますようお願い申し上げます。

十一月十日

発起人代表

山本安次郎

発起人

* 伊藤研一	稲葉元吉	* 稲村 毅	今井一孝
植村省三	榎本世彦	大橋昭一	岡田昌也
岡本人志	岡本康雄	* 小笠原英司	奥田幸助
海道 進	* 片岡信之	加藤勝康	川崎文治
川端久夫	北野利信	工藤達男	雲嶋良雄
* 河野大機	今野 登	権 泰吉	斎藤隆夫
斎藤毅憲	坂井正廣	* 佐護 晏	* 佐々木恒男
篠崎恒夫	鈴木幸毅	鈴木辰治	鈴木英寿
鈴木和蔵	* 相馬志都夫	* 高澤十四久	高田 馨
高橋俊夫	* 高橋由明	高柳 暁	一寸木俊昭
角野信夫	仲田正機	中村瑞穂	長岡克行
永田 誠	原田 實	平田光弘	藤芳誠一
二村敏子	細川 進	眞野 脩	万仲脩一
三戸 公	向井武文	藻利重隆	山城 章
山本安次郎	* 吉田 修	吉田和夫	波辺 峻

(* 印は経営学史学会設立準備委員会委員)

各位